

改変プリコネ部 スタイリッシュアクションの裏技

ス老イム

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

騎士クンが黒騎士クンになるかもしれないし貫通式したから覚醒したりするかもしれないお話

・ 閲覧注意的なシーンもあるっちゃある。

・ いろんな人の人格がほんへと180。くらい違いますねえ！だいたいイカれてる

・ 小説Devil May Cryシリーズの影響バチバチマン

・ 時系列的にネカマブツ倒した直後。第二部は記憶失ってないままやりますねえ！

・ ごめん、ユイ………！

・ 岸の名前はデフォのユウキ。

・ メインも絆もストーリーうろ覚えなんで、呼び名とかどっかしらかに齟齬があると思うけど許し亭許して。その代わりバトルは頑張ります (SMRUDK)

・ 現在の岸くんの進化は言動の変化以外にも発想がブツ飛んだりそれを実行に移せる技術力がありますあります。

・ 総じて赤ちゃんのアンチ (無印含めて) なのでアンチタグ付いてます

あと淫夢要素は (本文には) ないです

はい、よーいスタート (アメス並の棒読み)

覇瞳皇帝との決戦から一週間が過ぎ、王都にも漸く平和が戻ってきた頃。ユウキは一人王宮の鍛錬場に潜り込んでいた。

「今日は……ここまでだろうな。もう日が暮れる頃だろ」

『おい！誰かいるのか！今は訓練などしている場合ではないだろう！
発見次第貴様は免職だ！どこに隠れている！』

「おっと、見つかつちまうひと足お先に帰らせてもらうぜ。それと使えそうな装備も頂戴して……じゃあな」

「ああ……最近のコツコロが五月蠅いんだよな、もうガキじゃねエつてのによ。……聞かれてないよな？」

「主さま、今日はちゃんとお帰りになりましたね。鍛錬に精を出されるのもよろしいですが、サレンさまなどの心配する方もおられますし」

「(うわでた) あ、ああ、うん。気を付けるよ」

例の決戦以来、コツコロが四六時中着いて回るようになった。なんでも「私の知らないところで死なれたら困る」らしい。このままでは「今まで無能に近かったから、新たな力を手に入れて俺も戦う」という目的を告げたところで「主さまが前線に出る必要はありません」と一蹴されるだろう(暗に毎日説教されているが)。最近は事情を知ったサレンも釘を刺しているので針のむしろだ。

「(最初にあのクソツタレの自称皇帝と殺りあつた時から、俺には力がなかった。固有能力の代償とはいえ、鍛えていなかったのも事実。そして次に対峙した時、俺は心臓に穴空けられて死んだ。力が、なかったから……)」

「ちよつとあんた、顔色悪いんじゃない？早めに休んだら？」

「お言葉に甘えて、なんて言うとも思ったか？オツムが赤ちゃんじゃなくなつてからはやる事が多くてな。借りは返すもんだろ？」

「それはまあ、そうだけど。あと、今日の夕食担当はスズメよ？」

「食えるなら大丈夫だ。ペコリーヌに付き合つたら無駄に丈夫に

なつてたんでね」

「ああそうだ。飯で思い出したんだが、ペコリーヌ、当分抜けれそうにないらしいぞ。親御さんの目が覚めないんだと。なんとか時間を捻出しようとしてるらしいが、マジに余裕なさそうだな」

「それでしたら、ギルドマスターを主さまに変更なさるとか」

「いや……美食殿の目的がなくなっちまったら、どう考えても解散だろう。そんなときや新しくギルドを作るか、ここ(サレンディア救護院)に入れさせてもらうか、だ」

「えっあんたがここに？それはちよつと遠慮願いたいわね」

「えっと、あの、前のお兄ちゃんじゃないと、その……」

『アヤネ、何かあったら俺を全力でブン回すんだぞ？この手合いのは簡単に信用しちゃ駄目だ』「わかってるよ、ぷうきち」

「@X@」

「おいおい、冗談だよ。ま、ペコリーヌだつてずっと宮勤めじゃ丸くなっちまうだろうし、いずれ自分から脱走してくるだろう？そうなりや解散もしなくて済むぜ」

「それ、本人の前で言わないようにね？」

「あん？多分気にしてねエと思うが、覚えとくよ」

「早起きできるようになったのはいいが、最近はアメスにも会えてねエな。向こうでなんかあったか……？いないとしないで寂しいもんだな」

「主さま……またお一人で私より先に起きられるとは。最近はずっとも甘えてくださりませんね……？」

「(は？前の俺のどこがいいんだ？)悪かったよ、次はもっと長めに寝とくからさ」

「いえ、同じ布団で寝れば解決致します。主さまの寝顔も拝見できますし」

「……マジで言ってるの？俺もう記憶とか知識とか戻ってただけど？倫理的に問題しかないだろ、それ」

「??あの時から主さまは髄分と変わられましたね……赤ちゃんであつ

た頃が遠い昔のようです」

「その文句はラビリスタに言うんだな。復活の代償が『これ』だとは思わなんだ」

「主さまのお世話ができなくなるくらいなら……」

「(すまんなラビリスタ。多分刺されるけど俺は知らん)」

そのうち監禁や四肢切断もしてくるんだろうな、と心の中で毒づく。時折コツコロの目から光が失せているので、そう遠くない未来に起こりうるだろう。ある意味覇瞳皇帝よりタチが悪いのでかなり困る。

「……そこに突っ立ってられると着替えにくいんだが」

「お手伝い致しますよ、主さま」

「もう終わったぞ(早業)。それと私物全部まとめとけ」

「主さま、今日はどこかにお出かけですか？ああ、寝癖がそのままじゃないですか。私にお任せ下さいね」

「(寝癖はノーマークだった……) お出かけっつーか、引越しな。俺達も自分のギルドハウスに住む。これ以上今の俺がここに世話になるわけにはいかねエ」

「お待ちください主さま。サレンさまにはお話をされたのですか？何も言わずに出ていくのは、少々気が引けると言いますか……」

「いいんだよこれで。他のガキ共もビビってんだし、向こうは向こうで迷惑だろうしな。正直サレンの出ていけオーラに耐えられない」

「なるほど……ところで最近、主さまは一人立ちされようと躍起になられてますよね？」

「残念がるなよ、当然だろ。これに関してはアメスも賛成すると思うぜ？」

「……………」

犬の俺(わんわんの主さま)も連れて早急にサレンディア救護院を去る用意をする。こういうのは見られると案外面倒くさいのだ。

「書き置きは俺がする。コツコロは先にギルドハウスに行つてくれ。すぐに追い付く」

「私は主さまと肩を並べて歩きたいのです。それにサレンさまへの挨拶」

撈もしなくては」

「私がなんだったって？それとその荷物は何？」

「いいタイミングだな。俺達は自分のギルドハウスに引越すぜ。頭の中元通りになったらガキ共ビビっちまったし」

「それは主さまの態度の問題かと……」

「あー、やっぱり伝わってなかったみたいね。私は別に嫌いになったとか、そういうのじゃないのよ。ちよつと子供たちの情操教育によくない程度で」

「無理もねエよ。俺だつていきなりイカつい奴が乱入してきたらキレるしな。まあなんだ……たまに顔見せに来るからさ、それで勘弁してくれ」

「ええいいわよ。落ち着いたらあの子たちだつて貴方を受け入れることもできるでしょうし」

「意外とすんなり話が通りましたね……」

「ああ、長期戦は覚悟してたからな。つと、マジにもう行かねえとカリンがキレちまう。じゃあなサレン」

「失礼致しますサレンさま。お世話になりました」

「私も週に一度は帰れるようにするわ。積もる話はその時ね……」

「(来てくれないと何しちゃうかわからないもの)」

「!!この感覚は……」

「主さま？」

「な、なんでもない。気のせいだハハツ」

去り際にサレンから感じた気配に一瞬慄くが、疲れてるだけだと自分に言い聞かせて疑念を振り払う。

その気配は最近のコツコロからよく感じるものに酷似していた。

「(腰の使い物にならねエなまくら、置いて行ったらみんなの強化はできねエのか？まあそれならそれで普段使う分を背負って、無能剣は腰のままにしておこう)……」

「主さま、主さま……」

「(その辺にあるようなもんじゃねエ、俺の専用装備を揃えねば……少なくとも今は装備に頼らねエと生き残れん)……どうした？」

「主さまがお探しになっていたキヤルさまが向こうに」

「……？ああ、ホントだ」

ギルドハウスの壁向こうで見知った尻尾が揺れ動く。久しぶりに戻ってみたら誰もいないので困惑してるとか、そんなところだろう。

「ようキヤル、久しぶりだな？会えなきや会えないで物足りなかったんだぜ、どこ行ってたんだよ？とりあえず中に入っちまおう。俺達も荷物を降ろしたいしな」

「噂通り真逆の性格になってるわね……ちよつと見ない間にどうしちやったのよ」

「知らねエよ、生き返ったらこんななななな。慣れてもらうしかねエ。で、俺の質問に答えてもらおうか？」

「あー、どこ行ってたかかってやつ？その辺プラプラしてただけよ。特に理由なんてないわ」

「はて、主さまが手を尽くしてキヤルさまの居所をお調べになってましたが、今の今まで何の手がかりもございませんでしたよ？」

「えつなんでストーカーしてんのコイツら。純粹に怖いんだけど」

「お前がいねエと美食殿解体が早まんだよ。ペコリーヌはまあ……なんとかなるだろう。だが俺らはそうも言ってられん。やることやってねエんだし、まずはここに住んでだな」

「私は主さまと寝食を共にできるなら異存ございません」

「はあ!?! あんたら何言ってるか分かってんの!?! あたしはそんなの御免よー」

「どこが嫌なんだよ？俺がこうなったからか？直に慣れるだろこんなの」

「そうじゃないわよ！ぶつ殺すぞ!?!あのね、いい歳した男女が同じ屋根の下なんて普通しないのよ!?!」

「はて、サレンディア救護院でも同じことを言われましたが、どこが問題なのでしょう……」

「この通りだ。野宿だって着いてくるんだし、仕方ないだろ？」

「そーいやコロ助ってそういうところおかしいんだったわね……」

「まあ最終的な意思決定は自分にしかできねエから、無理にとは言わ

ん。寝心地のいいベッドと旨い飯（not 魔物&虫）がなくなるだけだ」

「あんたね……そんな条件出されたら飲むしかないでしょ？そーいうの、卑怯って言うのよ」

「そりゃ結構なことだ。暗くならないうちに自分の部屋決めとけよ？コツコロも俺と一緒にの部屋は無理だから、隣にするといい」

「分かりました、では今すぐ壁の一部をドアに致しますね」

「やべエな……」

「ヤバいわよ……」

コツコロはきつと、男女の営みを知ったら毎晩仕掛けてきそうだな。好みのタイプとは言えないのでたまったものじゃないが。壁の補強材も調達しないと、などの不安要素を抱えたままその日は眠りについた。……壁を削る音が聞こえたのは気のせいだろう。

「さて今日はパクった装備をそれと分からないように改造して、試運転と行くか。真っ先に必要なのは……遠距離攻撃武器だな。義手になっちまえば後付けが楽なんだろうがなあ……。それは後暗い連中に任せるしかねエな。鎧は一部をとっ払って型取っておいて、鍛冶屋に受注すりゃいいか」

「主さま、何をなさってるのですか？朝食が冷めてしまいますよ」

「あー、今日は勝手に食つとくよ。先に装着型のボウガン作っておきたいんでね」

「そんなもの、食後でもいいじゃないですか。それに主さまがわざわざ前に出る必要なんてありませんし……」

「そう言うなって。俺も討伐の依頼をこなせりや金の心配もないだろう？相手によっちゃ食材にもなるはずだしな」

「なかなか来ないから呼びに来てみたら何？あんた魔物食べるって言うの？はあく、アホリーヌが増えたみたいで嫌になるわ」

「食うのは俺だ。戦いつつ補給ができれば無限に戦えるしな。しかしまあ、キヤルまで来ちまったならしょうがねエ、飯にするか」

「ねえ、あんた本当に戦うの？あんたはあたしがいないと何もできないでしょ？できないよね？考え直してよ、せめてあたしの後ろにいな

さい。もしかしてあたしを捨てるつもりなの？」

「おつとオ？朝イチでくつそやべー地雷ぶち抜いたな？安心しろ、まだ俺一人じゃどこ行っても死んじまうよ。元からみんな連れてくつもりだったさ」

「そ、そう……ならいいわ」

「危なくなったら喚いても連れ帰りますからね、お覚悟のほどよろしくお願いします」

「(多分無理だと思うが……) あーうん、それでいいや。そうそう、出発前に俺の装備だけ整えさせてくれ」

そう告げるとユウキは片付けもそこそこに自室へと急ぐ。左腕部に固定するための台座を取り付けた小型軽量ボウガン、いつものなまくらに代わる長剣(王宮の兵士詰所から盗んだものの外見を弄っただけ)、爆発魔法を仕込んだ炸裂弾、大型のナイフ、丈夫なロープに巻き取り機能を付けたワイヤーフック。そして動きやすさを重視した鎧(肩、胸当て、腿の上部と腰周りのみ)。腰には矢筒と雑多なアイテムの収納用のバッグを縛る。マントはそういった装備を隠すために、以前のものより大きなものを調達しておいた。

一人で戦争でも起こせそうだな、と心の中で呟き、二人が待つロビーへと急ぐ。

なお、コツコロは変わり果てたユウキを見て気を失った。

「急造品でどこまでやれるか……まあやってく内に何揃えるべきかわかるだろ」

「あるじさまあゝゝえへへっ」

「コロ助……今はあなたに同情するわ……ほんとに誰よあなた」

「あん？俺は俺だよ。ちよいと頭ン中に浮かんできたものを形にしただけだぜ」

「ペコリーヌに見せられないわね……」

「ああ。もっと強くなってからじゃねエとまた嘲笑らわれちゃうからな」

「そーいうことじゃないんだけどね？ってかアイツ嘲笑らってない」と

思うんだけど」

多分暫くは使い物にならないコツコロを背負い、受注待ちのクエストを探しに行く。目当ては金も経験も得られる探索や護衛系だが、やはり人気なのだろう、ほとんどが受領済みになっている。

「仕方ねエ、勝手に洞窟に潜るか山を登るかしかないな。野生の魔物には貴重な糧になってもらってさ」

「帰れなくなったらあんたのせいだからね？コロ助が起きる気配もないし」

「じゃあ回復と支援ができるやつを連れていくか。やたら目を回すあいつが適任だ」

「きつききき騎士クン!?!どうしたのその格好!?!」

「未だかつて無い威圧感だよね……」

「正直今でも偽物なんじゃないかと疑ってるよ……」

「ここにや俺の噂は届いてねエのか？あの決戦を生き延びた奴らならみんな知ってるよばかり思ったが」

「いや、ちゃんと知ってるさ。ユイとヒヨリが三日三晩寝込んだだけで」

「そうかい、なら生き返らせたやつに会えたら言っとけ。『ユウキを元に戻せ』ってな。聞いてくれるかは保証できねエが」

「そ、それで騎士クンは何の用なの？」

「俺の鍛錬に着いてきて欲しい。現状回復と支援を頼めるのはユイ、お前だけだ。死ぬ前に回復してくれりゃいいからさ。あとコツコロが俺のギャップに耐えきれなかったみたいで起きなくてな、ここで預かって欲しい。子守番はレイとヒヨリに頼むぜ」

「それはいいけど、何の特訓なんだ？私達には知る権利があるだろう」

「俺は今よりも強くなれるなら何だつてするさ……。クソツタレの自称皇帝に二回も負けてんだ、当然だろ？今度こそ、何も喪失うしなわないようにな」

「そう、なんだ……ちよつと（騎士クンが）怖いけど、頑張るねっ!」「ちよつとちよつと、思いつきり引かれてるじゃない。大丈夫なの？」

「いないよりマシだ」

多少の不安要素は残るものの、ひとまずヒーラーも加わった。次に必要なのは、直接的な戦闘経験とまともに戦える剣といたところか。正直盗んできた剣だとバレたらマジに鉄格子と石畳が恋人になつてしまう。そこで閃いたのが加速用推進剤噴射装置のついた剣だ。理屈は分からないが、生き返ったあの時からアイデアがあふれてとまらない。それに応えるように力を求める声が脳内で木霊している。俺を弱者と縛める鎖は早急に断たねばならない。

だが、そんな思惑はある意味で予想できた相手に打ち碎かれる事になる。

「その少年、どこへ行くこうしてるのかな？悪いけど、キミのステータスはほとんど上がらないんだ」

#2

「ステータス……？何言ってるんだアンタ。最初に会った時から胡散臭エヤツだと思ってたが、今度はボケ始めたか？」

聞きなれない単語と、成長しないという宣言が怒りを誘う。まださしたる改造を施していない、背負ったままの長剣に手をかけているだけで済んでいる事に感謝して欲しい。

「キミが言えたことじゃないよね、それ。あと人の話は最後まで聞くものって教わってないのかい？」

「いいや、よく知ってるさ。『怪しいヤツの言うことを聞いてはいけない』までな。そうそう、説明が上手いやつってのは、俺みたいなのにも分かりやすく説明できるらしいぜ？」

そう嘯うそいてみるが、正直なところ返事はどうでもよかった。この手合いの連中は得てして説明ができないのだ。テレ女にも似たやつが二人程いて、苦勞した時の経験が活きているのを実感する。

「やはり、プリンセスナイトの力は返すんじゃないかな。酷いバグだ……人格に影響が出て……」

思惑通り、説明らしい説明は帰ってこない。これだから頭脳派だとかいう連中は嫌いなのだ。自称皇帝も何言ってるかさツパリ分からなかった。

「おい、質問には何らかの返答をするのが大人ってもんじゃないのか？見た目通りのイカれたやつだっけんなら納得はできるんだけどな」「いや、生き返らせた感謝くらいはするべきじゃないかな？」

会話にならねエなら黙って欲しいが、その願いは叶いそうにないので剣を抜いて赤髪のイカれたバーさん（確かラビリスタとか言ってた）に突きつける。

後ろでキヤルとユイが悲鳴を漏らす、気にしている場合ではない。ぶっちゃけそんなことに構っていたら時間などいくらあっても足りない。俺には時間が無いのだ。

が、

「こくら、弟君、ダメでしょ？そんな危ないものを人に向けちゃ」

二度と会いたくないと思っていた人物に遭遇したことで、思わず舌打ちをする。前にバレンタインデーだとかで無限にチョコを食わされたり、一挙手一投足を管理してくる様に震え上がったものだ。

どうしたものかと思いを巡らせていると、不意に後ろから知能がかつての自分以下みたいいな声がする。

「お兄ちゃん！今日は私もいるんですよ！」

「げっ、お前もかよ……」

思わず考えていたことを口にしてしまう。リノとシズルのコンビを出されると、流石の俺でも手こずる。

唯一の救いは、リノが俺の意図に気づかなかったことくらいか。

「なんかしらの説明逃れはすると思っただがな、天敵をぶつけるなんて随分と狡い真似してくるじゃねエか、オイ」

「んー、一応説明はしてもいいんだけどね、ほとんどの人が何それってなるから言っても無駄かと思って」

「あ？さっき言っただろ、誰にでも分かるように説明しろってな」

剣を収めつつ煽ってみるが、芳しい結果とはいかなかった。どうにもこのギルドの連中とは気が合う気配すらしない。

「ご要望通り簡単に言うただね、キミの体力や筋力は今を超えられないってこと」

なんとなくそんな気はしていたが（原因はわからないけど）、はつきり言われると案外刺さってくる。

とはいえ、経験そのものは無駄にはならないだろうし、何より使えるものは使っていけばいい。ちよつと後暗い連中に「手伝って」もらえば、俺専用の装備も楽に揃えられるはずだ。

そうこうしている内に、シズルがごく自然に俺をギルドハウスに連れて行くこうとしていたので、「抱き枕に腰でも振ってろ」と吐き捨て、放心状態のキヤルとユイを回収した。

イカれ学者ラビリスの言う通り、俺にはあまりパワーというものが無いらしい。キヤルはともかくユイを運ぶのに多大な労力を使ってしまった。

「性格が質量でも持ってんのかね……」

そう呟いたところで二人が起きてくれるわけでもない。仕方がな

いので、予定を変更して先に装備の作成を依頼しに行く。

場所が場所なので先にキヤル達を預けたいと思っていたところ、見回り中の狼^{マコト}娘^{コト}に出くわす。

「よう、ユウキ。珍しいなこんなところで」

「ああ、色々あってな。今日は私用でさ、この先に行きたいから、二人を自警^{カオ}団^ンのギルドハウスに連れてってくれないか？それなりの礼はするからよ」

「この先……ってお前、正気か!? ランドソルでも指折りのスラムだぞ!? なあ考え直せって、お前が死んだらユイがどうなるか……」

どうやら発作を引き起こしてしまったようだ。俺の中ではマコトもユイが好きなんだと思うようにしている。勝手に盛ってて欲しいが、そう上手く行くことは全くない。

「ユイユイうるせエな。丁度いいぜ、そのユイがいるんだ、ちゃんと面倒見とけよ?」

「あっおい! 待てコラ……! おい!」

埒があかなくなる前にキヤルとユイをマコトに押し付け、違法改造や密造を専門とするショップへと足を運ぶ。元より防具関連はここで調達しようと決めていたため、ショップの所在地も合言葉も既に調べが付いている。

改造ショップ『知恵と度胸の店』は、スラムの街道から二本ほど入り込んだ、生氣すら失せた路地のさらに奥にある。

普段の自分ならあつという間にカモにされてしまうが、今回は勝手に違った。ユウキが最も信頼を置いているギルドの「トワイライトキヤラバン」がガサ入れをした直後なので、荒事師達はまとめて病院送りにされていたのだ。

『Go^家 home^に and^{帰っ} take^て a^ク shit^ッ and^て go^寝 to^ち sleep^ま』

合言葉を唱えると壁の一部が凹^{へこ}み、内開きの扉になる。この構造のおかげで王宮騎士^{ナイト}団^{メア}などのガサ入れに今まで一度も見つかっていない。

「……珍しい客だな」

出迎えた職人の言葉は短く、そつけない。

「頑丈な鎧を頼む。関節と腰、胸が守れる程度のものでいい。それと、推進剤を噴き出す特殊な剣もオーダーしたい。どちらも設計図は既
に出来上がっている。納期はなるはやだが、その分は前金でな」

職人——名をゼノルドと言った——は、奇つ怪な注文に一瞬顔を顰しかめ
めるも、相場の倍近い前金を見て、「承った」とだけ返した。

「じゃ、失礼させてもらうぜ」

ユウキの返答もまた、短い。その堂々たる振る舞いが、この異空間
でも受け入れられる要因なのだろう。最も、彼自身は小さなランプが
映し出した己の影に気付かず終いだつたが。

「人を辞めようとする者を見るのは、都合八十六回目か……」

ゼノルドが呟いた声は、己以外の存在が失せた工房に小さな木霊と
なつて消えた。

(道を変えて正解だつたな。マコトのやつ、律儀に張り込みまつて
まあ……)

オーダーを終え、ホクホク気分の俺をお迎えしやがったのは、濃厚
な獣人族ビーストの放つ獣臭だつた。

普段ならならん意識してない匂いが、妙に鼻腔を擦くすくるのが余計に虫
の居所を悪くした。まあ、悪いことをしている自覚はあるのだが。
(どうせ引つ捕まえてご高説垂れるつもりだろうがな、俺はもうお前
らとは関われないんでね……サヨナラだ)

獣人は五感が俺らヒューマンとはえらい違いなので、見つからずに
ギルドハウスに帰るなんてのはどだい無理な話だ。それなら、なるた
け追いつかれない道を行くより無い。

退路のために、とトワイライトキャラバンにタレ込んだ影響で人
気が失せた建物を登る。屋根なら、いかに跳躍力が高くとも簡単には
登れないはずだ。

案の定、下から

「やっと見つけたぞユウキ！降りてこい、説教の時間だ！」

と吠えられる。

犬は嫌いじゃないが、こういう時だけは勘弁してほしい。

「だったら捕まえてみるんだな。ドッグランは得意だろ？」

屋根を伝いつつ、冷静に煽る。が、ここで計算違いが起きた。

端的に言えば、スラム街を抜けてしまった。家主に見つかつたらお咎めで済まないだろう。

こうなつた以上、降りざるを得なくなってしまうが、その為の保険も一応ある。相手の予想を上回る手を隠し持っていないければ、同じ轍を踏むだけだ。

「やれやれ、こんな体力じゃワンちゃんコンテンツは望めねエな」

「ハア……ハア……そ、そんなこと、今は、いいだろ……。さあ、ユイが、待つてる……早く、行くぞ？」

「あ？ユイに言つとけ、私用で顔を見せるな、つてね」

激しい爆発音と閃光が辺りを包む。本来は戦闘中に使う閃光弾だけに、その効果はお墨付きである。

「じゃあな、身体には気を付けろよ？つってももう聞こえてないだろうがな」

やがて来るであろう一般騎士に捕まる前に、俺は足早に現場を去つた。

ギルドハウスに戻る道すがら、雑誌で読んだ服屋に寄る。確かここはツムギが店主をやっていたはずだ。

とはいえ、未だに確執は消えておらず、隙あらば吹っかけてくるのだが。

「よ、随分出世したんだな。シャレオツな雑誌の巻頭特集だぜ？」

「え、誰なんですか貴方。そんな馴れ馴れしい人知りませんよ」

参つた。これから会う奴全員に説明するのかと思うと気が滅入る。

しかも大体信じてくれないので、余計に疲れる。

一先ず^{ひとまず}大まかな装備を外して様子を見る。

「この格好見て気付かないか？あと俺しか使えない剣も。なんならレイでも連れてくるか？」

「あー分かりました。騎士さんなのは分かつたんですが、何があつた

「んですか?」

「それこそレイ達に聞いとけ。俺からいくら説明しても納得はせんだろうしな。まあ、そんなことよりこのくたびれた服を一新したいんだが、頼めるか?」

「そんなこと……?でもまあ、レイ様に会えるならよしとします。ええと、そうですね……心こころな做しか体型が変わっているみたいなので、採寸が必要ですね」

「……そうか。驚くなよ?」

あの日、俺は知能と一部の記憶が戻る代わりに、傷跡が身体に残ってしまった。疼うずきこそしないものの、引かれるのは覚悟しなくてはならない。

「えっ………なんですかこれは。本当に生きてるんですか?」

「人を歩く屍ゾンビや屍食鬼グールみたいに言うんじゃねエよ。まああれだ、簡単に言うとは生き返った。さ、早いとこ採寸済ませようぜ?風邪引いちまう」

「そ、そうですね……!」

唐突にツムギの態度が変わったが、気付かないふりを決め込む。この先世話になるから、裸くらい慣れてもらわないと困るってもんだ。

「んー、色々変わっちゃったみたいですけど、どんな服が好みです?一から作った方がいいでしょうし」

「なら、まずは赤いフード付きのノースリーブシャツが一つ欲しいな」

「うん……うん!」

「インナーは黒くて伸縮性の高いものを三つ」

「えっ……」

「で、黒いレザーパンツ……これは一つでいい」

「この時期に……?」

「あと、寒冷地対策にレザークートが欲しい。表は濃紺で裏地をバーガンディーに仕上げてくれないか?」

「独創的ですね……」

「そうそう、白とワインレッドの半袖シャツも一つずつ頼むぜ。完成イメージ、置いとくよ。流石に服を作れるほど器用じゃないんでな」

「……………あの、本当に騎士さんなんですよね？」

まだ疑っていたのか。

まあ、確かに以前の俺なら絶対に着ないであろうというデザインだらけなので無理もないが……………。

それに、絶対にツムギには言えないが、袖の一部は装備を合わせた際に切断する予定でいる。

なんというか、切れ端がかっこいいと思うのだ。絶対理解されないが。

「そいつらは仕上がったら知らせてくれればいい。それまで着る服は今買っちゃおうぜ」

「あ、いえ、型紙作ればすぐなので、そんなにかからないと思いますが……………。って、そのジーンズとジャケットは……………その、売れ残りなんですけど」

「サイズ的にこれしかないだろう？さっきまで着てたやつは着たくねえんだよ」

俺が手に取ったのは、深緑のジャケットにベルト付きのジーンズだった。

明らかに似合っていないが、何も着ないよりはマシだろう。それに、ツムギも早く仕上がると言ってるわけだし、気にする必要はあまりないと思う。

「そんなの初老で銀髪でもないと似合いませんよ……………だから売れ残ってるわけですよ」

「分かったよ、大人しく出来上がるまで待ってるさ。それなら、このマントより少し大きい布が欲しい。色は黒だ」

「え、キモっ」

黒いマントに大剣にボウガンなんて、イカしたファッションは理解されなかったみたいだ。

「金は置いていくぜ、じゃあな」

(しまった、貯めてた小遣いがなくなったか……………服と飯と武装代、稼がないとな……………)

老人の頭髪並に寂しくなった財布を握り、ポケットに突っ込む。どうやら散財しすぎたらしいが、ロマンには敵わない。

腹の虫も泣き叫び始めた辺りで、俺は漸く窮地を理解した。

——ギルドハウス前にキヤルとコツコロ、トウインクルウイツシユとカオンのメンバーが揃っていたからだ——